

松本野々歩さん（ミュージシャン）

# ちいさい頃の あそびのまま、 音楽をやっている

撮影\*宮津かなえ

のびやかな歌声で  
聴くひとのこころを捉えてしまう、松本野々歩さん。  
音楽家の父とグラフィックデザイナーだった  
母のもとに育った野々歩さんの子ども時代は、  
音楽と想像力にあふれたものでした。  
あかちゃんから大人までを魅了する  
その歌声はどのように育まれたのでしょうか？

まつもと・のほ バンド「ジョビーン」、  
あかちゃんとおかあさん、おとうさん  
に向けた音楽を奏でる「チリンと  
ドロロン」、古今東西の童謡・あそび歌  
をテーマとしたユニット「ノノホとコ  
ーセイ」などでヴォーカルを務める。  
写真左下の四角い弦楽器は、父の雅  
隆さんが野々歩さんと妹さんのため  
に、つくってくれたもの。



4歳頃の野々歩さん、妹の更紗(さらさ)さんと両親と。「家にはしょっちゅういろんな大人が来て、妹とよく自作の人形劇を披露していました。それがいまステージに上がることにつながっているのかも。ライブをお芝居仕立てにしたり、構成を考えるのが大好き」と野々歩さん。写真提供(2枚とも)／松本野々歩



屋根裏部屋に飾られていた写真。5歳の頃から自分でやりたい、と習いはじめたヴァイオリンは厳しい練習に一度は挫折。でも、高校生のときに留学したアイルランドで、自由自在にヴァイオリンを演奏する地元のひとたちの音楽に触れ、再び手に取るように。

たのしみながら、音楽に触れさせてもらった

「子どもはたくさんさんの才能をもっています。大人になっても残っているものが、そのひとの才能かな?」と野々歩さん。

古楽器を使った音とあそびの楽団「ロバの音楽座」「カテリーナ合奏団」のリーダーである松本雅隆さん

を父にもち、子どものときからたっぷり音楽に触れてきました。まさに音楽はあそびの延長。

「たとえばいちごがあったら、母が『いちごについての歌をうたったら、食べていいよ』って。わたしと妹は食べたい一心で、うたをつくっていいました。『曲をつくりなさい』とは一度も言われたことはないけれど、いま思えばあそびのなかで作詞作曲をさせられていたのかも(笑)」

「わたしも感謝していると言います。ピアノでもバレエでも何でもやらせてくれました。でも、わたしは練習がきらいですぐやめたがって……。母は、ほかのことはあまり言いませんでしたが、約束や自分で決めたことを守ることは厳しかったですね」

「目を覚ませジグ」  
想像力がよみがえって

「父は公演で留守がちでしたが、年に一度は『音探しの旅』と言って、家族で世界中を旅していろいろなものを見せてくれました。2歳半のときのはじめての旅はインドに、その後留学をしたアイルランドも、最初

は家族との旅で訪れた場所でした。いろんな国の音楽や文化、そしてひとに触れたことは、その後の自分にとってとても重要ですね」と野々歩さん。でも、思春期の頃には自分のおかれた環境に反発した時期もありました。

「父やいまの自分とはぜんぜん違う音楽を聴いて、ぜんぜん違う服装をしていました。父は何も言いませんでしたが、夜、眠っているわたしの耳元で『目を覚ませジグ』と言っていたそうです。『ジグ』はこころのなかにも住んでいる妖精。父の造語です。ジグが目覚めると、うたいたくなったり何かつくりたくなったり、想像力がムクムクとわいてくる」。子どもの頃は想像力の固まりだった、と野々歩さん。眠っていた「ジグ」が再び目覚め、うたい出した野々歩さん。その素直な歌声に、わたしたちの想像力も広がります。



ノノホとコーセイ  
1stアルバム「ラララのダンス」  
2,200円  
ご注文・お問い合わせ ロバハウス  
<http://www.roba-house.com/>